

資料としての掲載のため、
以下の箇所等を省いております。
個人情報(氏名・住所・電話番号)
あいさつ・祝辞・寄稿・公募作文
(P1～7, 51, 52, 54～69)

鵜沼の名所旧跡

衣裳塚古墳：所在は羽場町。時期は5世紀初頭。直径5.2mの円墳で美濃に所在する円墳としては最大規模の古墳です。この衣裳塚古墳の東どなりに一輪山古墳という小さな円墳ありましたが、今から40年前にこの古墳を崩したら、銅鏡が出土しました。三角縁神獣鏡といわれ、この鏡は地方豪族が大和朝廷へ従属したしるしに朝廷からもらったものと解されています。従ってこれら古墳は千数百年前鵜沼地方一帯を支配した豪族の墓であることは間違いありません。因みに東町には5世紀後半に作られた円墳、金縄塚古墳も現存しています。



坊の塚古墳：所在は羽場町。時期は五世紀中葉。各務原台地の東端にあり、鵜沼東部の低地を見下ろす場所にあります。前方後円墳で西南向き全長89m 後円部の直径は9.7m 後円部の北方には巾10m以上の濠の跡があります。出土品としては勾玉、管玉、石斧等です。これらの古墳から、この地域に強力な豪族が存在していたことが伺われますが、その背景としては当時の美濃が大和政権にとっての東国経営の拠点的地域であったことや、この地が木曾川の水運や美濃と尾張の交通の要衝であることがありました。

大安寺：室町初期応永二年(1395)に笑堂常訴(摂津国兵庫の出で京都建仁寺に入り後、但馬国大明寺で修業した高僧で大安寺を開いた当時、その徳を慕って集まる者は二千人に及んだと伝えられる)を開山とし美濃国守護土岐頼益によって創建されました。それ以来南禅寺派の(今は妙心寺派)寺として栄え、応仁の乱頃には京都の著名な禅文学者 万里集九が当山の多くの僧侶たちと親しく交際するなど、史書にも度々その名を留める大きな寺でした。つい先頃創建600年祭が盛大に行われました。



土岐頼益・斉藤利永の墓:大安寺境内東南隅に二基の墓が建っています。土岐頼益は美濃国の守護であり大安寺の開基、赤松、一色と並んで幕府七頭の一つに列した程の強力な守護大名でした。美濃の国には土岐氏の勢力を背景に創建された禅宗寺院が多くありました。斉藤利永は頼益の子、持益(守護)の執権をつとめ、又守護代でもあり大安寺は彼の氏寺でもありました。

芭蕉句碑:俳諧師芭蕉は吟行の途次前後 3 回にわたり鶴沼を訪れ脇本陣坂井邸に泊まっております。一回目は貞享 2 年 3 月野ざらし紀行の途次大垣を経てこちらへ到着一泊。二回目は貞享 5 年 7 月岐阜を経て来鶴、坂井邸一泊。3 回目は名古屋から当地へ二泊した後、更科紀行へ旅たちました。その際、当地で詠んだ句が句碑として二宮神社下の一角に建てられています。



中山道:鶴沼は古代から交通の要衝として栄えた土地で古代中世の東山道各務駅や宇留間市の立った所、近世では中山道鶴沼宿駅として宿駅制度の拠点であり、人と物の集散地でありました。中山道 69 次中、江戸から 53 番目の宿場で約 100 里 30 町。本陣は桜井家、脇本陣は坂井家、野口家がつとめており、旅籠の数は 25 軒人口 246 人 家数 68 軒が大体の規模であったようです。当時鶴沼から江戸まで徒歩で 10 日、1 日 10 里の道のりだったようです。

うとう峠:中山道は慶安 4 年(1651)それまで木曾川を越えて犬山善師野から可児へ抜ける道筋から鶴沼の山沿いを通り、うとう峠を超え太田宿へ出る道に付け替えられました。うとう峠は長坂 うとう坂とも呼ばれ旅の難所でした。峠の左右に一里塚がほぼ原型のまま残されています。付近には山賊のために命を失った旅人の供養塔もあります。



村国神社:飛鳥時代この地一帯を治めていた村国氏の祖が天之火明命ほかを御祭神として創建された社であります。弘文元年壬申の乱が起こり豪族村国男依氏は大海人皇子方につき大功を得て、帝の信任厚く時の政権の座につきましたが死後、子息村国連嶋主によって、この社に祀られ以来村国の社と呼び代々村国一族が守ってきました。

村国真墨田神社:御祭神は天之火明^{あめのほあかりのみこと}命 村国男依ほか五祭神、創建は10世紀初頭とされている。当神社は美濃国一ノ宮南宮神社の系列であり又尾張国一ノ宮の真墨田神社の系列でもあります。飛鳥時代にこの地一帯を治めていた村国氏の祖を祀っていることは村国真墨田神社の所在地が美濃 尾張の国司と村国の勢力が集中していたことを伺わせます。



伊木山城:伊木山城は木曾川が濃尾平野に流出した口元に位置し、美濃の全城が展望できる要衝の地を占めています。城主伊木清兵衛は信長の中濃作戦に当たっては犬山城に味方し、信長に敵対していましたが後に、秀吉の説得に応じて秀吉に従って、戦功を重ねており、後には池田家に仕え家老にまでなっています。

鶴沼城:鶴沼城は一名、城山ともまた、霧ガ城ともいわれ、木曾川を挟んで犬山城の対岸に位置しています。城主大沢治郎左衛門の居城でしたが、伊木山城と同じく信長の中濃作戦に当たっては敵対、秀吉に攻められ頑強に抵抗していたが、遂に落城、羽場の内野で自刃し果てた。これが内野の「三の塚」であると云われています。



名勝木曾川:われわれ鶴沼人にとって木曾川は“母なる川”と言っても良いと思います。ヨーロッパ人にとってライン川、ドナウ川がそうであるように。鳥居峠奥の鉢盛山を源流として延々227 Km（日本8位）寝覚の床を始めとする溪谷美と濃尾平野の肥沃を与えてくれております。昔は交通の大動脈として、また文化交流の場として、最近では多くのダムを抱え電力源として役に立っております。岡崎出身の志賀重昂が日本風景論を書き、木曾川国定公園として天下に知られております。また、鶴沼東部犬山は、名古屋人の観光ポイントとして栄えたところでもあり名古屋市を始め大企業の別荘、寮が立ち並んでおります。時あたかも各務原市長が音頭をとり木曾川学が提唱されております。これも木曾川を自然環境学、考古歴史学、民俗文化学等各方面からの研究を進め郷土愛、都市アイデンティティの育成に資せんとするものであります。

貞照寺:わが国の女優第一号川上貞奴が昭和8年62歳の時に建立した寺で、本堂の玉垣には中村歌右衛門、尾上梅幸ら歌舞伎新派の名優の名が刻まれております。

彼女は熱心な不動尊の信者で本堂の壁には彼女の不動信仰の生涯をつづる感動的な場面が立派な彫刻として飾られております。彼女の音二郎妻としての女優活動は有名ですが福沢挑介を助けての恵那峡ダム建設の成功物語も忘れてならぬところだと思います。



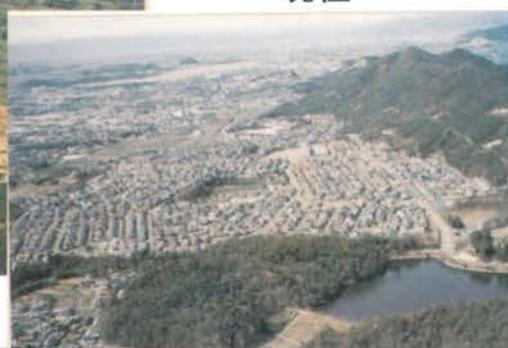
写真でみるつつじが丘の30年

昭和53年頃

造成期（昭和49年頃）団地全体



現在



7丁目 石亀神社より北側を望む



つつじが丘公園付近から南側を見て

平成8年頃



まちづくりの活動拠点の変遷

昭和55年3月 広報会集会施設完成

地域住民の融和と自治の振興を目的

まだ、周辺に住宅が建設されていないことがわかります。



集会所の完成

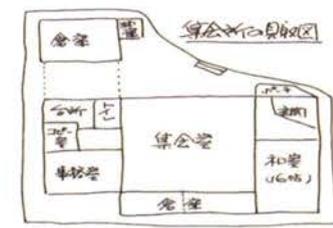


昭和61年8年増築検討委員会の答申

昭和62年4月

つつじが丘の文化活動の殿堂、
コミュニティーセンターとして
また、開かれた自治会の象徴として
住民の期待をいっぱい受け竣工

当時は和室に人気が集まる



平成16年2月

高齢者、障害者、幼児等に優しい施設
台所を吹き出しが出来るように改修



安全性、利便性によりバリアフリーと
なった玄関

自治会の発足と変遷

わが街つつじが丘の自治会が発足以来、今日まで30年を経過しましたが、その規模、会員の年齢、家族の構成、時代背景等の変化に伴い如何なる歩みをしてきたのか、大きな節目毎に過去を振り返ってみたいと思います。

(1) 自治会の発足

わが街は昭和47年度より造成が始まり、昭和50年に入居が開始されました。興人鶴沼住宅に50世帯足らずの入居者があり、その人達が興人との売買契約第12条（分譲地内の付属施設等の管理は買主が本分譲地の他の購入者と協同して自治会を結成し自治会の責任と負担においてこれを行う。）に基づき、昭和51年3月28日西町公民館において「興人つつじが丘広報自治会」を発足させたのが始まりです。当時は街路灯もなく仮設の集会所もないところで初期の自治会活動が始まり、運動会、団地内清掃、防火訓練等をスタートさせ、続いて盆踊り大会、班代表者会議発足などにより、連帯意識の高揚が行事のみならず組織面からも序々に促進されることになりました。

(2) 広報会から自治会へ

当時の自治会は広報会と称しておりましたが、広報会は市の広報行政の補完に資することを目的に、住民の推薦により市長が委嘱した広報会長により構成された行政の末端組織という位置づけでした。各地区の広報会は原則として小学校の校区別に分けられており、当地区はまだ八木山小学校が開校されておらず、松が丘とともに鶴沼第一小学校区に組み入れられました。（八木山小学校区連合広報会となったのは昭和56年4月からです。）広報会はその基本的性格が行政の末端組織であるところから、ともすると住民不在となりかねないことを憂慮し、4年目より「広報」の二字を削除「つつじが丘自治会」と名称を変更しました。“住民主体の自治組織”たる性格を鮮明に打ち出したものです。即ち、「自分達のために、自分達の手で、自分達の街をつくる」との基本理念に基づいており、このことは自治会30年の歴史の中で多少の変遷はあっても、一貫して守られてきています。

(3) 世帯数の増加と組織の見直し

昭和55年頃から、世帯数が346～424へと増加し広報会の数も4広報会、5広報会と膨張するにつれ、今まですべての行事が自治会全体として行われ、自治会活動を底辺で支えている班長会議も全体会議の形をとっていましたが、「この形態では自治会運営が上意下達方式に傾き過ぎる、もっと各広報会にも自主性を」との声が出始めました。この頃から、広報会毎に班長会を開き、各行事も広報会単位で行われるようになりました。一方、松が丘を含めた八木山校区全体としての組織づくりも始まり、校区市民運動会、校区子ども会、校区青少年育成会、八木山連合広報自治会等の発足を見ることになりました。更に、世帯数が480を超えた昭和57年度からは広報会独自の活動に重点が置かれるようになりました。昭和59年、60年になると会員数も700を超え、街の規模も急速に膨れ上がり自治会活動に対する住民の意識にも格差が出始め、組織の運営方法等につき再検討の機運が盛り上がりました。そこで、過去10年間を総括するために、住民に対するアンケートの実施、さらには「組織等諮問委員会」の設置を見ました。本委員会の答申は入居者の急増による自治会に対する住民意識の希薄化に憂慮し、班長会議形骸化の防止策の一つとしてガイドブックの作成、役員選出のあり方、事務局機能の強化、自治会長広報会長兼務体制が提案され、住民主体の自治組織であることの確認を求めるなど組織見直しの時代が続きました。

(4) 高齢化問題への対応

昭和62年の12月総会において「高齢化対策をぬきにしてふるさとづくりは完成しない」との住民の声があり平成元年には高齢化対策問題等諮問委員会が発足いたしました。その答申としては、自治会の中に専門委員会を設置し、長期的視野に立って福祉の街づくりを進めることが提案されています。平成3年専門委員会が立ち上げられ、3年間の検討の結果、平成6年福祉活動基本方針が提案され承認されました。それによると高齢化が急速に進む中、自治会でできること（互助）、行政に依頼していくこと（公助）、高齢者本人が努力してもらうこと（自助）を区別しつつ、住民全員が、高齢化問題を自分のこととして捉えることの必要性を説いております。また自治会の対応については、当面自治会主導型で推進し（総論的な立場で高齢化のため街づくり、いわば土壌づくりを主体とする。）、具体的な福祉問題は関係福祉団体（近隣ケアグループ、民生児童委員、社会福祉協議会）を推進母体として進めることを提案しました。併せて自治会組織の中に福祉委員会を常設することで長期的な視野に立った福祉活動を展開する際の要とすることになりました。この頃、大きな出来事としては、平成4年4月福祉の拠点ふれあいセンターが竣工、平成6年4月には公共下水道接続問題が無事解決、更に自治会の成人式とも言うべき、創立20周年を迎え、自治会をあげて、盛大な行事が行われたことがあげられます。この20年間、戸数も1000戸を超え、新しい街づくり、ふるさとづくりの努力が実り、市内有数の自治会組織に育ったことを感謝するとともに高齢化の時代にむけて、思いやりの街づくり、明るく住みよいふるさとづくりを目標に更なる前進を誓って諸行事が行われました。

(5) 少子高齢化に対応する組織の更なる見直し

20周年を迎えてから4～5年は人口増も一段落し、横這いが続くこととなり、自治会としても一応の形が整い比較的平穏な時代が経過しましたが、自治会の組織、行事の両面で硬直肥大化が目立ち始めるとともに高齢化が序々に進んでまいりました。この間、つつじが丘公園整備事業が進められ、ボランティアハウス構想の進展、自治会財源として行政からの振興交付金の支給が始められました。平成13年3月つつじが丘の高齢化率は10.6%になり、5年後の平成18年には16%に達することが予測されています。その一方で少子化も急速に進み平成13年285名の児童数が平成17年には20%減の227名になることが予測されるなど、急速に進行する少子高齢化社会に適應できる自治会の体質改善が急務の課題となってまいりました。時の役員会は平成13年3月組織等諮問委員会を発足させ、少子高齢化に対応可能な自治会のあり方、組織の肥大化硬直化に対し少数役員体制での効率的な運営形態、主催行事の見直し、これらの改革に見合う規約改正につき答申を求めました。即ち、町の建設時代の住民自治と成熟した町のそれとは自ずとそこに質の変化が求められるとは云いながら、住民間の相互扶助、町の安全対策、生活環境の保全等の基本的な自治会活動のあり方は充分再確認した上で、改革すべきは改革するという見地から、半年間にわたり慎重な検討がなされ、答申がなされました。この答申に基づき、行事の一部廃止、組織の簡素化（単位自治会役員の減員、専門委員会の縮小、本部組織の効率化）及びこれに伴う規約の大幅改正を行い、高齢化に対処する体制が整いました。現在、自治会は新しい路線を進みつつあります。30周年を記念して福祉と環境をメインテーマにこれまでの歴史を振り返りつつ、共に喜び 共に感謝するとともに、地域への愛着をより深めるための各種行事が展開されようとしております。

少子高齢化に対応する自治会のあり方

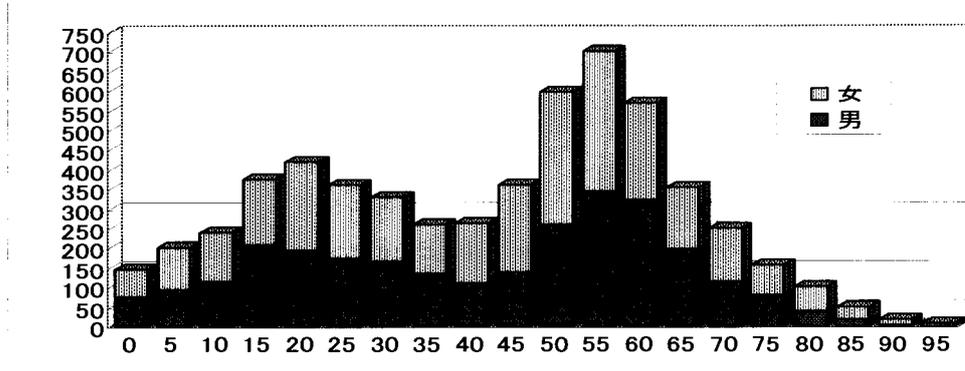
まちの人口構成の変化

市人口統計 八木山校下年齢別人口分布より

現 在

1,892世帯 5,789人

平成16年4月



15歳以下 585人 (全体比 10.11%)

男 2,795 女 2,994 合計 5,789人

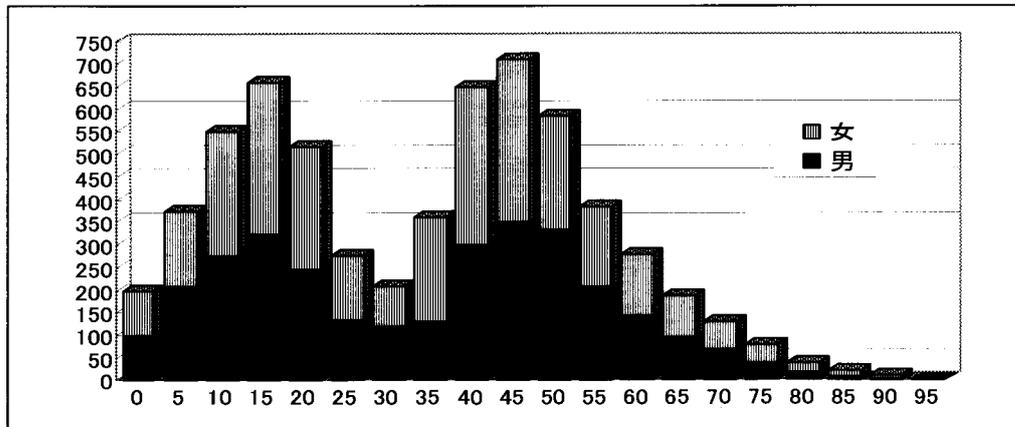
65歳以上 933人 (全体比 16.12%) 高齢者人口

一世帯あたりの人数 3.10人

10年前

1,741世帯 6,169人

平成6年4月



15歳以下 1,115人 (全体比 18.07%)

男 3,020 女 3,149 合計 6,169人

65歳以上 400人 (全体比 6.48%) 高齢者人口

一世帯あたりの人数 3.54人

十年前に比べ、一世帯当たり平均で0.4人少なく、義務教育を受けている15才以下の子ども的人数は約8%も減少し、総人口でも380人減少している。また、逆に65才以上の高齢者人口は533人増加している。子どもと若手の働きざかりの人口が少なくなっており、少子高齢化をはっきり示している。今後もこの傾向が著しく進展する。